

令和2年度 第99回 全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会 総評

報告者：高体連技術部 南稜高校 横山晃一

新型コロナウイルスの影響で、関東大会および学校総合体育大会が中止となるなど、例年にない予定変更が強いられるなか、今年度の令和2年度第99回全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会が9月6日から11月15日の期間に開催された（1次予選9月6日～20日、2次予選トーナメント10月11日～11月15日）。2次予選トーナメントは、関東プリンスリーグに所属している昌平高校と、U18埼玉県リーグ（Sリーグ）に所属している23校に加えて1次予選を勝ち上がってきた28校の計52校によるトーナメント方式で実施された。優勝は昌平高校、準優勝に武蔵越生高校、3位に正智深谷高校と西武台高校という結果となった。昌平高校は2年連続4度目の優勝で、12月31日に開幕を迎える全国高等学校サッカー選手権大会への切符を掴んだ。

優勝した昌平高校は埼玉県の高校チームとしては唯一プリンスリーグに所属し、2月の新人戦で優勝。さらに2次予選前には所属の4選手がJリーグ内定を決めるなど優勝候補筆頭にあげられ、各チームからの厳しい包囲網が予想されるなど、例年以上に周囲から期待と重圧のかかる難しい精神状態のなかで3回戦から登場した。他の都道府県予選では同様に注目される優勝候補のチームが敗れ去っていく知らせが届くなかで堂々たる試合展開を繰り広げながら、浦和南、武南、正智深谷、武蔵越生といった実力校を破っての栄冠となった。

昌平高校はいずれの試合においても1-4-2-3-1のシステムを採用し、DFラインからボランチを経由して丁寧に組み立ててボールを大切にしながら主導権を握り、両SBを含めたサイドのコンビネーションからゴールへ迫る傾向が強かった。それに加えて1トップの⑪小見のオフザボールの駆け引きと動き出しが良く、パス1本でDFラインの裏に抜け出して決定機を生み出すこともできる。守備面については2ボランチの⑥柴と⑦小川の準備と予測が良く、また全体の攻撃時の距離感が良いことで高い位置での素早い奪い返しができ、相手の攻撃の芽を摘みながら波状攻撃を可能にしていた。試合によっては押し気味に進めながらゴールを奪えない状況も見られたが、浦和南戦では唯一の交代出場者として66分に投入された⑨篠田大が75分に決勝点を決め、正智戦深谷や武蔵越生戦ではトップ下の3人（⑧荒井、⑩須藤、⑭平原）がポジションを変えることで打開して得点に結びつくなど、相手チームからの対策を受ける中でも後半に改善して勝つという修正力の高さが際立った戦いぶりであった。

準優勝となった武蔵越生高校はチームとしての戦い方が明瞭で、勝ち上がるにつれてそれが自信となっているように感じられた。1-3-4-2-1のシステムで、自陣に押し込まれる試合展開では、守備時に両SHがDFラインまで下がって5バックを形成して前線には3人が残り、1-5-2-3のような形になる。センター3人のDFは高さがあり、両サイドに降りる②戸澤⑨石井はスピードがあって簡単には1対1の突破を許さないの、5バック形成時には堅固な守りを築くことができる。決勝戦でも昌平高校のスピードある②小澤⑤本間の両SBにしっかり対応して前半は無失点であった。奪っては前線3選手のコンビネーションが良く、少数でもゴールを脅かすことができる。前線の選手は速攻でスプリントをするだけでなく相手攻撃を規制するための守備意識も高いので、必然的に負荷が高くなり1試合を通した強度を保つことが困難であるが、選手層の厚さがそれを解決していた。3回戦以降は⑧五

十嵐や⑩渡辺が途中から出場して決定的な仕事をするため、守っている時間が長くてもチームに悲観的な雰囲気は見られなかった点が印象的であった。

3位となった2チームのうち、正智深谷高校は個々のフィジカル能力が高く、またポストプレーが得意な⑨佐宗、スピードのある⑥倉林の突破、⑩松山のゲームメイク力、得点力のある⑪山本、セットプレーに強い④大塚など、特徴のある選手が配置されていて、相手選手とのマッチアップで優位性が高いところを見極めながら試合を進めていた。もうひとつの西武台高校は伝統の1-4-3-3から今大会に向けて3バックを採用して臨んだ。初戦となった3回戦の浦和西戦では1-3-5-2システムでスタートしたが2点を先制され、後半から1-3-4-3に変更し逆転勝利。準々決勝では細田学園高校を相手に1-3-4-3システムでスタートし、途中から1-5-4-1の形に変更。準決勝では1-3-4-3システムに戻して臨んだ。柔軟に戦うことができたのは、選手個人の戦術理解度が高かったためと言える。

冒頭にも記述した通り、今年度は関東大会と学校総合体育大会が中止となった。頂点の座を掴んだ昌平高校は新人戦に続いての2冠となった。また、新人戦でベスト4に入った残りの3校がいずれも今大会で準決勝まで駒を進めたことになる。新人戦での結果がシードされてトーナメントの4つ角に入ったとはいえ、しっかりと勝ち上がってきたところを見ると今年度はこの4チームが埼玉県内での4強にふさわしかったと言えそうである。安定した強さを発揮して全国大会への挑戦権を手にした昌平高校には昨年度の躍進以上の活躍をして、埼玉スタジアムでの雄姿を見せてもらいたい。

今大会は新型コロナウイルスの影響で満足のいく準備が整わなかったチームや選手も少なからずいたと伺っている。会場での応援内容も制限されるなかで大会を迎えることになったが、声援に変わる手拍子や拍手、試合後の相手選手や指導者と交わされる挨拶、会場役員への声掛けなど、例年以上にサッカーができる喜びと感謝の気持ちが表現された大会であったと感じている。全国大会でもそのような爽やかな光景が見られることを期待しつつ、結びとしたい。